

自由、その名はサマーヒル (2)

—SUMMERHILL—

著 A. S. Neill

訳 真 崎 良 幸

サマーヒルの卒業生

親が子どもの将来を心配しても、子どもにとってプラスになることはない。親は心配のあまり、子どもに実力以上の学習を要求するものである。こういう親は「わが子」が自然に読み書きができるようになるまで待ってられない。強制しないと人生の落伍者になってしまうと恐れるのである。こういう親は子どものペースを尊重しないで、後ろから口出ししてせかすのである。そして、こう言う。「うちの息子は十二歳になっても読書ができないで、どうして実社会で成功できるだろうか」また「もし、十八歳になって大学入試に落ちれば、彼に残された仕事は肉体労働しかないではないか」と。しかし、私は、たとえ子どもが進歩をみせなくても、じっと待つのがいちばんだということを知っている。この子が苦しめられたり、傷つけられたりしなければ、最後には必ず成功することを私は知っている。もちろん、世間の人は「あなたは、トラックの運転手でも人生の成功者だというのですか」とおっしゃるかもしれない。私の「成功」の定義とは「喜んで働き、積極的に生活できる」ということである。この基準でいえば、サマーヒルの卒業生はほとんどが人生の成功者だといえる。

トムは五歳のときにサマーヒルにやって来た。そして十七歳で卒業するまで一度も授業に出なかった。彼はいつも工作室で何かを作っていた。彼の両親は将来のことがとても心配だった。彼には読み書きを学ぼうという気持ちは全くなかったからだ。しかし、彼が九歳のときのある夜、彼の部屋に行ってみると、

ディキンズ著のデビッド・カッパーフィールドを読んでいた。私は声をかけてみた。

「やあ、トム。誰から読み方を習ったんだね」

「自分で覚えたのさ」

数年後、彼は私の部屋に来て「 $\frac{1}{2} + \frac{2}{5}$ はどうやって計算するの」ときいたのを教えてやった。「ほかにききたいことはないかね」と言うと「ありません」と言って帰っていった。

卒業後、彼は映画スタジオのカメラマンとして働いている。彼が実習生として働いていたときに、夕食会で彼の会社の社長にお会いしたので様子をきいてみた。

「やつは最高ですよ。いつも仕事が速いし、週末にも必ず仕事に出てくる。土曜、日曜だというのにスタジオから離れようとしません。実に仕事熱心なやつですよ」

また、ジャックという、読み書きができない少年がいた。誰が教えてもだめであった。読み方を教えてもらいに自分で来たときでも、bとp、lとkの区別がなかなかつかなかった。彼は十七歳で卒業したが、そのときはまだ本が読めなかった。

今、ジャックは工具作りの専門家になっている。彼は金属細工の話が好きである。今ではもう本が読めるようになっている。特に、機械に関する書物が好きである。心理学の本もときどき読むそうだが、私の感じでは今でも小説などには全く興味がないと思う。しかし、彼の英語は文法的にも正しい立派な英語になっている。また、彼の常識もすばらしいものがあった。彼の過去を知らないアメリカ人の客がこう言った。「ジャックはなんて賢いやつだ」と。

今度はダイアンの話をしてみよう。彼女は授業には出ていたが、あまり熱心ではなかった。彼女の興味は学問にはなかったからだ。私は長い間、彼女はいったい何をやりたいのだろうかと考えた。十六歳で卒業したが、そのときは誰がみても劣等生だった。しかし、今ではロンドンで新しい料理法を開発したことで話題になっている。彼女はこの専門分野でプロになったのである。しかし、

もっと大切なことは、彼女が仕事を楽しんでやっているということだ。

ある会社では新入社員の条件として大学入試共通テストで基準点をとる必要があった。ロバートがこの会社の入社を希望したので、社長宛に推薦状を書いてやった。

「ロバート君は共通テストの基準点には達していませんが、それは彼の頭が学問に向いていないだけなのです。そのかわり、彼には根性があります」ロバートは面接して、めでたく合格した。

十三歳になるウィニフレッドは外部からやって来た生徒だが、教科はみんな嫌いだと言っていた。私が、サマーヒルでは自分のしたいことをしていいんだよという、飛び上って喜んだ。また「来たくなければ学校を休んでもいいんだよ」とも言った。彼女はしばらくの間授業に出ないで遊んでいた。数週間後、手持ちぶさたで退屈になってきた。ある日、私のところに来て言った。

「何か教えてよ。退屈でたまらないわ」私にはこやかに答えた。

「それはよかった。で、何を習いたいんだい」

「うーん、わかんないわ」

「そう言われても、私にもわからないよ」と言ってその場は別れた。

数カ月後、彼女はまたやって来て言った。

「わたし、大学入試を受けるわ。先生の授業に出してちょうだい」

こうして彼女は毎朝、私と他の先生と一緒に勉強した。彼女は「教科が好きなわけじゃないけど、入試に合格しなきゃ、という目的があるから勉強してんのだよ」と打ち明けてくれた。ウィニフィールドは自由の中で自分自身を発見したのであった。

自由の子どもは数学が好きであるということは興味深いことである。地理と歴史にも興味を示すようだ。自由の子どもは与えられた教科の中から自分に興味のあるものだけを選ぶものである。自由の子どもははたいていの時間を教科以外のこと——木工、金工、絵画、小説、演劇、空想劇、ジャズ・レコード鑑賞などに費すものである。

トムは八歳だったが、いつも私の部屋に来て、きくのだった。「ねえ、何を

していいか教えてよ」しかし、教えるものは誰もいなかった。

六カ月後、トムに会いたいと思えば、彼の部屋に行けばよかった。そこに行くといつも彼は書類の山にうずもれていた。何時間もかけて地図を作成していたのである。ある日、ウィーンの大学教授がサマーヒルを訪れたことがあった。彼はトムに会っているんな質問をした。あとで私のところにやって来て、「私はトム君の地理の知識を試してみたんだが、私の知らない地理にも詳しい少年だ」と言っていた。

ここで失敗の例もお話しすべきだろう。十五歳になるスウェーデン生まれのバーベルはサマーヒルで一年間過ごした。その間、興味の持てるものは何一つ見出せなかった。サマーヒルに来るのが遅すぎたようだ。今までの十年間の学校生活で彼女の心はゆがめられていた。彼女がサマーヒルに来たときは、もう自分からやろうという気持ちは全く失せていた。人生に退屈しきっていたのである。幸いにも、彼女の家庭は裕福だったので、将来はちゃんとした結婚生活が約束されていた。

また、ユーゴスラビアから来た、十一歳と十四歳の姉妹にも手をやいた。われわれは彼女らに興味のあるものを見つけ出すことができなかった。二人はユーゴのクロアチアン語でよく私に悪態をついたものだ。この子らが立ち直るのは奇跡以外にはないように思えた。われわれが共に心が通うのは美術と音楽の時間だけだった。母親が二人をひきとりにきたときは本当に肩の荷がおりた気持ちだった。

サマーヒルの子どもたちを、長年観察してわかったことは、技師を目指す子どもは大学入試などには興味を示さないということだ。卒業後は実用的な訓練所に行く。大学に行く前に実社会を経験するのである。汽船の給士として世界を回った者もいる。ケニアでコーヒーの栽培に従事している卒業生も二人いる。遠く、ニューギニアまで行った者もいる。

デリック・ボイドは自由教育が培う典型的な冒険心を持っていた。彼は八歳でサマーヒルに入学して、十八歳で大学入試に合格し、卒業していった。彼は自分では医者になりたかったのだが、父親が医学部にやれるほど裕福ではなか

った。そこで、お金がたまるまで実社会を見てみようと思った。彼はロンドン阜頭に行き、二日間かけて就職を探してみた。釜炊きでも何でもいいからやってやろうと思ったのである。ところが、当時は船乗りでさえも失業が多いことを知らされて、がっかりして帰って行った。

しばらくして、スペインでおかかえ運転手を募集しているイギリス婦人がいることをきいた。デリックはこの機会をとらえて、スペインまで行き、この婦人のところで働いた。彼は家を建ててやったり、増築してやったりもした。また、運転手としてヨーロッパ中を旅行したり、大学にも行かせてもらった。学費はこの婦人が出してくれたのである。二年後、婦人はデリックに頼んで一年計画でケニヤまで車で行き、そこで、また家を建てさせた。そして、デリックはケープタウンで医学博士になったのである。

十二歳のときにサマーヒルにやって来たラリーは十六歳で大学入試に合格して、タチヒで果実の栽培をした。この仕事は実入りが少なかったのでタクシーの運転手をやった。そして、ニュージーランドに行き、いろんな仕事をやってみた。そこでブリスベイン大学に入学した。先日、この大学の学長がサマーヒルを訪問してラリーのことを褒めていた。「休暇で学生はみんな休んでいる時にラリーは製材所で熱心に働いていましたよ」彼は今ではイングランドのエセックスで開業医をやっている。

冒険心を持たない子どももたまにしかいる。その子らについては訳あって書くのを控えたい。家庭がうまくいっていると必ず子どもはうまくいく。デリックや、ジャックやラリーの親はみんな学校の方針を完全に信じていたので、子どもは、学校が正しいのか、家庭が正しいのか、と迷うことはなかったのである。

さて、サマーヒルから天才は生まれたのであろうか。今のところはまだである。まあ、創造性を発揮する者は生まれた。もっとも、まだ有名にはなっていない。また、芸術家も、音楽家も輩出している。作家はまだいない。センスのいい家具デザイナーもいるし、高級家具製作者もいる。俳優もいるし、独創的な仕事のできる科学者や数学者もいる。在校生の数が一学年約四十五名と少ないわが校としては、かなりの割合の生徒が創造的、独創的な仕事についている

と思う。

しかし、何度も言ってきたが、一世代の自由の子どもだけではたいした証明にはならない。サマーヒルにおいてさえ、あまり授業に出なかったことでいじている子もいる。これは、入試に合格ということが就職への関門となっている現実の中ではしかたのないことであろう。また、普通、家ではメリーおばさんが「十一歳になっても本もろくに読めないなんて！」と言ってけしかける。だから子どもは、「外の世界では遊びはだめで、仕事がいいものである」ということを、うすうす感じるのである。

一般論で言うと、自由教育は十二歳以下の子どもに効果がある。十三歳以上になると、過保護の教育から解放されるまでかなりの時間がかかるものである。

サマーヒルのプライベート・レッスンとは

昔は、私の主な仕事といえば、生徒の前で教えるというようなものではなく、「プライベート・レッスン」というものをやっていた。子どもには心理学的接触が必要だと思ったからだ。また、他の学校から転校してきた子どもが、サマーヒルの自由の雰囲気及早く慣れるためにと考えてきたものである。子どもの精神が束縛されては、自由という土壌にはなじめないからである。

プライベート・レッスンとは暖炉のそばで生徒と気楽におしゃべりをするこゝとである。私はパイプをくわえて椅子に座り、子どもも煙草をすってもいいようにしている。煙草は教師と生徒との間の障壁を取り去るよい手段である。

ある日、十四歳の子に、私の部屋で話をしようとして誘った。この子は私立学校の典型ともいべき厳しい学校から転校してきた生徒であった。彼の指は煙草のヤニで黄色くなっていた。私は煙草を取り出して、彼に一本差し出した。彼はおずおずと「ああ、どうも。でも、ぼくは煙草は吸いません」と言った。

私は、にこやかに「しらばくれるんじゃあねえよ。いいから一本とりなさい」と言うと、彼は一本とった。私はこの時、一石二鳥をねらっていたのである。つまり、この少年にとって校長とは、厳格で権威を持った人なので、自分

の本心は絶対に明すことのできない存在だった。彼に煙草を勧めたのは、私が彼の喫煙を認めていることを言いたかったのである。また、「しらばっくれるじゃねえよ」というようなことばを使ったのは、権威を捨てて、彼と同じレベルに立とうとしたのである。さらに、校長でも、子どもたちが使っているようなことばを使うのだということを示すことで、彼の権威に対する劣等感を取り去ろうとしたわけである。この最初の会話のときの彼のびっくりした顔といったら、写真に撮っておきたいくらいであった。

彼は窃盗で前の学校を退学になった生徒である。私は言った。「君は盗みのプロだそうだね。ところで、鉄道会社を乗っ取るにはどうしたらいいか教えてくれないかね」

「ぼくは鉄道会社なんか乗っ取ったことはありません」

「そんなことは、かまわないじゃないか。やってみなきゃ。方法はいろいろあるよ」私はこう言って二、三の方法を教えてやった。彼はびっくり仰天した。校長が盗みを奨励するなんて、まさにサマーヒルは彼にとって狂気集団そのものであったろう。数年経った今、彼は、このときの会話は一生の中で最大のショックだった、と回想している。

さて、どういう生徒にプライベート・レッスンは必要なのだろうか。ここでいくつかの実例をあげて説明してみよう。

幼稚園児担当のルーシー先生が私のところに来て、「ペギーは反社会的で、寂しそうです」と言うと、私は「それじゃあ、彼女をここに連れておいで。プライベート・レッスンをやろう」と言うのである。ペギーが私の部屋にやって来る。

「プライベート・レッスンなんて嫌だわ」と言いながら彼女は椅子に座る。

「バカバカしいったらありゃしない」

「全く同感だね。時間の浪費だね。今日はやめよう」と私は話を合わせる。彼女はしばらく考えて、ゆっくり話し始めた。「でも、少しならいいけど」彼女は私の膝に座っていた。私は彼女に父親のこと、母親のこと、特に弟のことについていろいろきいてみた。彼女は弟のことを「あいつ、あほんだらよ」と

言った。

「そうだろうね。お母さんは、君よりも弟の方が好きなのかい」

「ううん、どちらも好きよ」とすばやく答えた。そして付け加えた。「お母さんはそう言ってるんだけどね」

不幸というものは兄弟喧嘩から始まる場合もある。しかし、家庭から手紙をもらって、自分の兄弟が新しい人形や自転車を買ってもらったことを知ったときに問題が生じることが多い。プライベート・レッスンが終わるとペギーはすっかり元気になって帰って行く。

転入生の場合はそう簡単にはいかない。赤ん坊は医者が連れてくるのだ、と教え込まれていた十一歳の子どもがいた。こういう子を嘘と恐怖から解放してやることは容易なことではない。なぜなら、こんな子どもはマスターベーションに対して罪悪感を抱いているからだ。この子の幸福を考えるならば、まず、この罪悪感を取り除く必要があるのだ。

たいていの子どもにはプライベート・レッスンは不要である。理想的な形は子どもが自らプライベート・レッスンを求めにくることである。年長の子どもは時々自分で求めに来る。年少の子どもも、たまにはそういうことがある。

十六歳になるチャーリーは同年の子どもに対して劣等感を持っていた。私は彼に、どんなときにいちばん劣等感を感じるのかをきいてみると、他の子どもと一緒に風呂に入っているときだという。自分のペニスが小さかったからだ。私は、なぜそんな気持ちになるのかを説明してやった。彼は六人の姉を持つ末っ子であった。すぐ上の姉とも十歳のひらきがあった。父親は亡くなり、姉たちが家の支配者であったため、家庭内は女性的な雰囲気であった。チャーリーもまた、権威を持つためには女性的にならなければいけないと思っていたのである。

プライベート・レッスンに十回ぐらい来たあとで、チャーリーはもう来なくなった。私はなぜなのかきいてみた。すると「もうプライベート・レッスンなんか必要ないよ」とにこにこして言った。「ぼくのおちんこはパートと同じぐらい大きくなったんだ」

しかし、治療の中で、問題はこれだけではないことがわかった。チャーリーは、マスタベーションをやると、おとなになってインポ（不能者）になると教えられていたのだ。このインポになるという恐怖心が彼の肉体にも影響を与えていたのである。彼が治癒された原因は、罪悪感を排除したことと、インポに関するバカげた嘘を取り除いたことにある。チャーリーはそれから一、二年して卒業していったが、今では健全で、幸福な生活を送っている。

シルビアの父親は非常に厳格で、決して娘を褒めるようなことはなかった。逆に、いつもがみがみ言って批判ばかりしていた。彼女の唯一の願いは父親の愛を獲得することであった。彼女は部屋に座って、この話をしてくれたとき、さめざめと泣いた。このケースは治療がなかなかむずかしい。なぜなら、この子を分析しても父親が変わるわけではないからだ。この問題はシルビアが成人して、一人立ちできる年齢になるまで解決策はなかった。私は彼女に警告した。

「君は父親から逃げようとする気持ちが先走って、よくない人と結婚することになるかもしれないよ」

「よくない人って？」

「君のお父さんみたいな人さ。つまり、君をひどい目に会わせる人だ」と私は言った。シルビアのケースは悲しむべきものである。サマーヒルにおいては全く社会性もあり、やさしい、人から好かれる子であるのに、家に帰ると悪魔に変身するのである。このケースでは明らかに、分析が必要なのは娘ではなく父親なのである。

フローレンスの場合も解決困難であった。彼女は私生児であったが、そのことを知らされていなかった。私の経験からいうと、私生児は無意識のうちに自分の生い立ちのことを知っているものである。フローレンスも、自分の生い立ちに何か隠されていることを感じていた。私は母親に、この問題の解決方法はただ一つ、子どもに本当のことを教えてやることだと言った。

「でも、ニール、私怖い。私は言ってもかまわないの。でも、あの娘がそれを秘密にできるかしら。お婆ちゃんにでもわかれば勘当ものだわ。遺産も分けてもらえなくなるのよ」これには、ほとんど困ってしまった。フローレンス

が立ち直るには、お婆さんが亡くなるまで待つしか手がないようだ。真実を隠しては何にもできないのである。

二十歳になる卒業生が、しばらくの間、学校でプライベート・レッスンを受けたと言ってきた。

「でも、君は在学中にやったじゃないか」

「たしかに、やりました」と彼は悲しげに言った。

「でも、あのときは上の空だったのです。今、その必要性を痛感するようになったのでお願いにあがりました」

最近では定期的な診断はやっていない。普通の子どもは、出生の秘密を明してやったり、マスタベーションの問題を解決してやって、憎悪や嫉妬の原因は家庭環境にあることを教えてやると治るケースが多い。子どものノイローゼを治す手段は感情の解放にある。子どもに心理分析学の理論を説明したり、「君には劣等感があるのだ」と言っても、問題の解決には到らない。

以前、十五歳の生徒がノイローゼになったことがある。彼はプライベート・レッスンに来て、ただ「うん」とか「ううん」という返事をするだけだった。そこで、私は荒療法を考えた。そして、次のプライベート・レッスンでこう言った。

「今朝は、先生が君をどう思っているかを率直に話そう。君は、まったくの怠け者で、愚かな、自惚れやの、おたんこなすだ」

「えっ、なんだって。そういうお前さんは何さまだっていうんだい」

この瞬間から、彼はことばがスムーズに出て、要領よく話せるようになった。十一歳のジョージのケースも書いてみよう。彼の父親はグラスゴーの近くの村で小さな店を営んでいた。彼のかかりつけの医師の紹介でサマーヒルにやってきた。彼の問題は強い恐怖心であった。家から離れるのが怖いのである。近くの村の学校でも怖くて行けない。家を出るときに、恐怖のあまり大声を張り上げるのである。父親がほうほうのていで、この子をサマーヒルまで連れて来た。ここに着いても、父親にすがりついて、わんわん泣いたため、父親は家に帰れなかった。私は、二、三日泊っていかれたらと提案した次第である。医

師の診断書があったので読んでみた。それはこの子の問題を的確に把握してあったのでとても役に立った。父親は長く滞在するわけにもいかなかったのが、私はジョージに話してみた。しかし、彼は家に帰りたいたって泣くばかりである。

「こんな牢獄みたいな学校なんて大嫌いだ」

私は彼の涙を無視して話しつづけた。

「君が四歳のとき、君の弟は病院に連れて行かれたんだね。そして、戻って来たときには棺桶の中だった。（すすり泣きが激しくなる）君が家を出たがらないのは、君にも同じことが起こると思っているからだ。つまり、君が家を出ると、帰るときには死人になって帰ってくる。（さらに大声で泣く）しかし、それよりも、もっと大きな問題があるんだよジョージ。君は弟を殺したのだ」
このとき彼は強く抵抗して、私を蹴ろうとした。

「ジョージ、君が実際に弟を殺したわけではないけれども、君は弟の方がお母さんから好かれていると思っていたね。だから、弟が死ねばいいと思うこともあった。そうだろう。しかし、弟が本当に死んでみると、君はひどい罪悪感を感じたのだ。弟を殺したいという君の願いが叶った。君は本当に、自分が弟を殺してしまったと思い込んでいる。だから、君が外出すれば、神の天罰によって君も殺されると思っているのだろう」

彼は泣きやんだ。翌日、駅で多少ジョージはぐずついたけれども、どうにか父親を帰すことができた。ジョージはなかなかホームシックがなおらなかったが、一年半後に、休暇に入ると、一人で家に帰ることを自ら申し出た。そして一人でロンドンを渡って帰って行ったのである。そして、またサマーヒルに戻って来るときも一人であった。

子どもが自由の中でコンプレックスをなくしていけば、実際、治療などは必要ないのだということとを日に日に確信するようになってきた。しかし、ジョージのようなケースは自由だけでは解決できなかったであろう。

今までに盗み癖のある子どもにもプライベート・レッスンをやってみたが、見るべき成果が現れている。しかし、プライベート・レッスンを受けつけない

子もいた。だが、三年間の自由の生活の中でこれらの子どもたちも立ち直っている。

サマーヒルの治療法は愛だといえる。つまり、子どもを一個人として認めてやることであり、偽りのない自由な世界を与えることである。わが校の生徒の中でプライベート・レッスンが必要な生徒はほんの一握りにすぎない。子どもに創造的な仕事をやらせるのがいちばん良い治療法だといえるだろう。子どもには工作や、劇や、ダンスをやらせるのがいいと思う。

ここではっきりしておきたいことは、プライベート・レッスンは感情の解放を目的としたものであるということだ。子どもがふさいでいるときにおこなうのであって、決して本が読めないからとか、数学がきらいだからということで、子どもの心理分析をしようというのではない。子どもが、なかなか本を読めるようにならないのは、親の期待過剰からくるものである。また、算数が嫌いな子は、以前習った算数の先生が嫌いだった場合が多い。

私の存在は子どもにとって、当然、父親の象徴となる。私の妻の存在は母親の象徴である。子どもとの関係においては、妻の方がぶが悪い。それは、私が女の子から慕われるのに対し、妻は彼女らの母親に対する無意識的憎悪をまともに受けるからである。一方、男の子は母親に対する愛情を妻に向け、父親に対する憎悪を私に向けるのである。しかし、男の子は女の子に較べて、憎悪をあまり外に表さない。それは、男の子は、人に対してより、物に対して関心を示すからだろう。男の子が怒るとボールを蹴飛ばすのだが、女の子の方は母親の代わりとなる象徴に対して陰険なことばを吐くのが常である。

しかし、公平を期すために言うておくと、女の子が陰険で扱いにくくなるのは一定の時期がある。つまり、思春期の最初の一年間ぐらいである。また、すべての女の子がこの段階を踏むわけではない。それは、以前の学校がどういう学校だったのかとか、母親の権力に対する態度がどうであるのかによって左右される。

プライベート・レッスンでは家庭と学校に対する、子どもの反応の相関関係を指摘してきた。つまり、私に対する子どもの悪口は父親に言いたいことであ

り、妻に対する悪口は母親に言いたいことである。私はなるべく客観的な分析を行なうことにしている。主観的な深みに入れば子どもにとって好ましくないと思うからである。

もちろん、主観的な説明が必要なときもある。ジェーンの場合がそうであった。ジェーンは十三歳だったが、みんなに「ニール先生が呼んでいるよ」と言って回るのであった。

「ニール先生が呼んでるってジェーンが言ったので来ました」という生徒が何人も押しかけてきたことがあった。わたしは後でジェーンに言ってやった。

「君は、自分が私のところに来たいから、あんなことをしたんだろう？」

プライベート・レッスンのコツは何だろうか。私には何もこれとあって、決まった方法があるわけではない。ときには「君は鏡に写る自分の顔が好きかい」と言って切り出すこともある。答えはいつも決まって「いいえ」である。

「自分の顔の中でいちばん嫌いな部分はどこだね」

これも答えはいつも「鼻です」である。

おとなもこれと同じような答えを出す。人間の顔は外界に対する窓である。友だちのことを考えるときにはまず顔が出てくる。人と話すときにも、相手の顔を見て話す。だから、顔というのは内部の自分が表れる窓である。子どもが、自分の顔が嫌いだと言うとき、それは自分の内面が嫌いだという意味なのである。次に私は内面に入り込む質問をする。

「自分の中で何がいちばん嫌いかね」

普通、返ってくる返事は外見に関するものが多い。「足が太すぎる」とか「でぶだから」とか「ちびだから」とか「髪が嫌い」といったようなものである。

私はこういうときに自分の意見を言わない。つまり、「うん、でぶだね」とか「そう、やせっぽちだね」といったような同意を表すことはしない。また、そうじゃないということを押しつけたりもしない。容姿に話題があるときには、その話が尽きるまで話して、それから内面の問題に入っていく。

私はよく、おもしろいテストをやる。まず、こう言って始める。

「今から先生がいくつかの項目をあげるから、自分で自己採点をしてみない

かね。たとえば、「ゲーム」と言ったら、この分野で自分がどのくらいの才能があるかを点数で表してごらん。「勇気」では何点だろう。100点満点で点数をつけてごらん」

ここに十四歳の男の子のケースを参考までに書いてみよう。

「美貌」……………あまり自身ないから45点。

「頭脳」……………まあ、60点ぐらいかな。

「勇気」……………25点

「忠誠心」……………友だちを裏切ったりしないから80点。

「音楽」……………まったくの音痴。0点

「工作」(もぐもぐ言って聞きとれなかった)

「憎悪」……………これはむづかしいや。解答不能だね。

「ゲーム」……………66点。

「社会性」……………90点。

「ばかさ加減」…これは人に負けないから190点。

当然のことだが、子どもの返事によって話合いの機会もてる。私はまず、子どもの自我を喚起させるために、子ども自身の話題から始める。そして、家庭の話へと移る。こうすると、子どもは興味を持って気楽に話してくれる。

幼い子どもの場合、自然な方法でやる。子どもの赴くままにさせるのである。六歳のマーガレットの場合がこの典型的な例であろう。彼女は私の部屋に入ってきて「先生、プライベート・レッスンやってよ」と言う。私は「よっしゃ」と言うと彼女は安楽椅子に腰をかける。

「プライベート・レッスンっていったい何なの」

「食べ物じゃないことはたしかだね。あっ、でも、たしかこのポケットの中に何か食べ物があったぞ。ほら、キャラメルだ」

私はそのキャンディーを彼女にわたした。

「どうしてプライベート・レッスンをやりたいんだい」

「エヴリンもやったからよ」

「ああ、そう。じゃあ自分のしゃべりたいことを話してごらん」

「私、人形買ったわ。（しばらく間をおいて）あの暖炉の上にあるものほどで買ったの。（彼女は明らかに返事を求めている）この部屋には、先生がくる前は誰がいたの」

彼女の質問は何か重要な真理を求めているようだった。それは出生についての真理に違いないと私は推測した。

「赤ちゃんはどうして生まれるんだい」と私は突然質問してみた。

マーガレットは立ち上ってドアのところまで行き「プライベート・レッスンなんて嫌いよ」と言って外へ出た。しかし、二、三日経つとまたやってきて「P. L. もう一度やってよ」と言うので、また再開するといった具合である。六歳になるトミーも私が「露骨」な質問をしなければおとなしい。最初の三回は、彼は怒って出て行った。なぜだか私にはわかっている。彼はマスターベーション禁制の犠牲者であった。

プライベート・レッスンを受けなくてもよい生徒はたくさんいる。彼らには必要ないからである。こういう子どもは家庭で、親の説教や、嘘のない世界ですくすくと育った健全な子どもである。

治療を施しても、すぐには効果が現れるものではない。普通は一年ぐらいかかるものだ。だから、まだ、未完成の精神状態で卒業していく子どもに対してもそう悲観はしていない。

トムは他の学校でうまくいかなかったのでサマーヒルにやってきた。私はこの子に一年間みっちりプライベート・レッスンをやった。しかし、目に見えて変わったところはなかった。卒業するときは、一生、ろくでなしで終わるかのように見えた。しかし、一年後、親から手紙をもらったが、医学に進むべく、大学入試の勉強を熱心にやっているそうである。

ビルの場合もっと深刻だった。三年間もプライベート・レッスンをやったが、十八歳で卒業したときは、まったく目的意識のない、どうしようもない青年であった。卒業後、一年間は職を転々と変わったが、最後に農業の仕事をやろうと決心した。今では熱心に仕事をやり、万事うまくいっているようだ。

プライベート・レッスンとは、実は再教育のことである。その目的は道徳や

恐怖心から生まれる劣等感を取り除くことにある。

サマーヒルのような自由学校はプライベート・レッスンがなくともやっていける。プライベート・レッスンとは、たとえていうならば、夏の晴々とした自由の到来の前に、春の大掃除をやるようなもので、再教育の過程を早める働きをするにすぎないのである。

サマーヒルの自治とは

サマーヒルは支配者のいない自治体であり、民主主義を基本とした学校である。社会生活、あるいは集団生活のすべては、処罰を含めて、土曜日の夜の自治会で決定される。

自治会では教師も生徒も、年齢を問わず一票を与えられる。つまり、私の一票と七歳の子の一票は同じ価値なのである。

みなさんはこれを聞いて笑いながらこう言われるかも知れない。「そうは言っても校長の一言は生徒の意見よりも影響力が大きいのでは？」と。はたしてそうだろうか。かつて私は自治会で、十六歳以下の喫煙を禁止しようという提案を出したことがある。私はその理由をいくつかあげた。「たばこには中毒性があり、身体に有害なものであるし、また、子どもは本当にたばこを吸いたいという気にはならないはずである。おとなの真似をしようとするつっぱり行為である」と主張した。そのあと、反対の意見が出された。そして採決となり、多数決で私の負けであった。

この続きがおもしろい。私の提案が否決された後、十六歳の子が、十二歳以下の子どもの喫煙は禁止すべきだという提案を出した。そしてその案が採択された。しかし、翌週の自治会で十二歳の子が新しい喫煙禁止規則の撤回を要求して、こう言った。

「ぼくたち十二歳以下の者はあの規則ができてからみんなこっそりと便所の中でたばこを喫うようになりました。これじゃあサマーヒルもふつうの厳しい学校と同じではありませんか。これはサマーヒルの理念に反してはいないでし

ようか」彼のこの意見は大喝采を浴びた。そして自治会は前の規則を撤回したのである。これを見ても私の意見が必ずしも子どもの意見より影響力が大きいものではないということがおわかりになったと思う。

かつて私は就寝時間の規則違反について強く抗議したことがある。近くの部屋の者は寝れないし、本人たちも翌朝遅く起きてふらふらしながらうろついている。私は、違反者の小使いを全部罰金としてとりあげるべきだという提案を出した。すると十四歳の子が、就寝時間を過ぎたら一時間につき一ペニーの褒美をやったらどうだろうと言った。私の賛成者はわずかで、彼の方が多数の支持票を得た。

サマーヒルの自治は官僚的なものではない。議長は毎回変わり、前回の議長が次回の議長を認名する。書記は希望者がやる。就寝委員は交替制であり、二、三週間以上も続くことはない。

われわれの自治会は規則もつくる。たとえば、海にいくときには教職員の監督なしでは泳げない。屋根にあがることも禁止している。就寝時間も守らなければならない。違反者は自動的に罰金ということにしている。休日の前後の授業を休みにするかどうかは自治会の投票によって決める。

自治会がうまくいくか否かは議長の肩にかかっている。四十五人の血気盛んな子どもをまとめる仕事は容易なものではない。議長には騒がしい者に罰金を科す権限が与えられている。だから弱い議長の時には罰金が多くなる。

もちろん教職員も自治会の話し合いには参加する。私も参加する。もっとも私が中立の立場をとらねばならない場合もある。かつてある子どもが違反行為で訴えられたことがある。彼には完全なアリバイがあったので無罪放免となった。しかし、実は、この子は本当に自分がやったことを私に打ち明けていたのである。こういう場合、私はいつも当人の味方になってやらねばならないと思っている。

もちろん投票になると私の提案であろうと、誰の提案であろうと私もみんなと同様に、投票する。ここに典型的な一例がある。私はかつて休憩室でのフットボールはやめようという議題を提起したことがある。休憩室は私の部屋の真

下にあるので、仕事中はうるさくて困ることを説明した。部屋の中でのフットボールはやめようと提案したのである。これには何人かの女の子と、年長組の数人と、教職員のほとんどが賛成してくれたが、結局は否決された。つまり私は今後も私の部屋の下騒音に堪えなければならなくなったわけだ。しかし、自治会で議論をかさねていくうちに、私の意見が認められ、ついに休憩室でのフットボール禁止を可決したのであった。こういうふうにして一般に小数派は民主主義の中でしだいに認められていくのである。つまり少数派はあきらめないで要求を続けるのである。このことはおとなにも子どもにも同様にあてはまることである。

一方、学校生活の中では、自治とは関係なく決定される部分もある。たとえば、寝室をどの部屋にするかとか、食事のメニューの作成や経理などは妻にまかせてある。また、教職員の採用および解雇は私がやることにしている。

サマーヒルの自治は単に規則を作るだけでなく、学校集団としての社会性などについて話し合う。学期の初めに就寝に関する規則が投票によって決められる。年齢によって就寝時間が違うのである。集団の中における個人の行動という問題がでてくる。そこで、スポーツ委員、学期の終りに開催されるダンス大会の委員、演劇委員、就寝委員、そして校外における非行の実態を報告する補導委員などを選出しなければならない。

最も議論が盛んになるのは食事の話題のときである。私が、お代りをもらうのはやめにしようとして提案すると怠屈な会が、がぜん活気づく。食物に関する好みの問題になると真剣そのものである。しかし、食糧の浪費の問題が出てくるとあまり、関心を示さなくなる。食物に関する子供の態度はもともと個人的で自己中心的なものである。

自治会では教科の話はしない。子どもはとても实际的であり、こむずかしい理論などにはめもくれない。抽象的なものではなく、具体的なものを好む。私は以前、校内で汚ないことばを使うのはやめようと提案したことがある。理由も述べた。それはこういうことである。サマーヒルに入りたいという子どもを連れた母親に校内を案内していた。そのとき、突然二階からひどいことばが聞

こえてきた。それを聞いた母親はすぐ子どもをかかえて急ぎ足で帰っていった。私は自治会でみんなに訴えた。「この頓馬な生徒のおかげで入学者が一人減り、収入が減ることになった。こんなことがどうして許されるだろうか。私は何も道徳をうんぬんしているのではない。まったく財政上の問題として訴えているのだ。みんなが汚ないことばを一回使うたびに生徒が一人減ることになるということを知ってほしい。」

これに対して、十四才の男の子が立ち上がって言った。「ニール、あなたはバカなことを言っている。あの母親がそんなことばにショックを受けたのはサマーヒルの理想を信じていない証拠ではないか。たとえばあのとき帰らないで子どもを入学させたとしても子どもがサマーヒルから初めて家に帰ったときに“Damn!” だの“Hell!” だのということばをきいて母親は結局退学させることになるのではないだろうか」みんな彼に拍手を送った。そして、私の提案は否決されたのである。

自治会はいじめの問題を議論することもある。みんなは弱い者いじめに対しては厳しい。自治会の弱い者いじめに関する規則が掲示板にはってある。「弱い者いじめはどんな場合でも厳しく対処する」サマーヒルでは厳しい学校に比べて弱い者いじめはあまりないが、理由は簡単である。おとなが厳しいしつけをすると子どもは憎悪者になる。そして、おとなに対して憎悪を表わすと叱られるので、小さな、弱い子に憎悪を向けるのである。しかし、サマーヒルではこんなことはめったに起らない。普通の場合は、ジェニーがペギーをバカ呼ばわりしたことが判明したときに、いじめの問題として自治会に出されるぐらいである。

盗みの問題が出されることもある。盗みに対して処罰はない。盗んだものを返してくれればそれでよい。子どもがよく私のところに来てこう言う。「ジョンがデビットから小銭を盗みましたが、これは心理の問題として処理すべきでしょうか、それとも自治会に出すべきでしょうか」

そのとき、私がこれは心理的な問題で、本人と話し合う必要ありと判断した場合、「この問題は私にまかせてくれないかね」と言う。しかし、もし、ジョ

ンが正常で幸福な子であり、ちょっとしたでき心でやったのなら、この審判は自治会の処置にまかせる。この場合、いちばん重い罰は、盗んだお金を全部返済するまでジョンの小使いは停止されるのである。

さて、自治会はどんなふう運営されているのだろうか。学期の始めに議長が選出されるが、一回限りである。閉会后、この議長が次回の議長を認名する。一年を通じて、このやり方を通す。苦情や、訴えや、提案があったり、新しい規則をつくりたいと思う者はだれでもそれを提案することができる。

典型的な例を紹介しよう。ジムはジャックの自転車のペダルを盗んだ。理由は自分の自転車のペダルが壊れていて、週末に友だちとサイクリングに行く計画があったからだ。自治会は、この件を十分に調査し、検討した結果、次の判決を下した。「ジムはペダルを戻すこと。そして、サイクリングを取り止めること」

議長は言う「異議ありませんか」

ジムが立ち上がって「ありがてえかった」と叫んだ。「こんな不当な判決はないよ。ジャックがあんなおぼろ自転車はまだ使ってるなんて知らなかったんだ。やぶの中に何日も放ったらかしにされていたんだ。もちろんペダルは戻すけど、サイクリング禁止はひどいよ。その判決は不当だと思う。」

これに続いて活発な議論がかわされる。話し合いの中でジムは毎週、家から小使いを送ってもらっているのだが、ここのところ六週間この小使いが送られていないので一文なしだということがわかった。そこで前判決を撤回すべきだという提案が出され、これを可決した。

しかし、ジムの処置はどうすべきだろうか。遂に、学級費からお金を出してジムの自転車を直してやろうということになった。また、ジムの友だちはペダルを買うために寄付してやった。おかげでジムは楽しくサイクリングに出かけることができたのである。

普通は、自治会の判決は違反者によって受け入れられる。しかし、判決を不服とすれば、違反者は訴えることができる。この場合、議長は会の終りに再審するのである。不服の訴えがあった場合、以前よりも慎重に論議され、一般に、

原判決は、違反者の不満を考慮して、緩和されるものである。子どもたちは、違反者が不当な判決だと感じるのは実際に不当である可能性がありうることを認識しているのである。

サマーヒルの違反者は自治会に対して反抗したり、憎悪を示すものはない。判決に対して違反者が素直に従う様を見て私はいつも驚くのである。

学期中のある日、四人の大きな子どもたちが自分たちのたんすの中のもの売り払ったとして自治会で訴えられたことがある。こういう行為は衣服を買ってくれた親に対しても学校に対してもフェアなものではないとして禁止されていた。なぜ学校に対してもフェアではないかということ、子どもが衣服をもたずに家に帰った場合、親は学校を監督不行届きだとして非難するかもしれないからだ。この四人の少年の判決は「四日間の外出禁止」と、その間の「就寝時間8時」となった。四人は何の不平も言わずに判決に従った。月曜日の夜、みんな町に映画を見に行っている時だったが、この四人の中の一人、ディックがベッドの中で読書をしていたので、私は近づいて、

「ばかだなあ。みんな映画に行っていないのに。外に出ないのかい」

彼は、「からかわないでください」と言った。

サマーヒルの子どもたちの自治に対する忠誠心は驚くべきものがある。そこには恐怖心も反抗心もない。私は、ある子どもが反社会的行為で長い間尋問を受け、判決を下される過程を見てきた。そして、今回判決を受けた子どもが次の議長に選ばれる場合も何度となくあった。

子どもの正義感にはいつも関心させられる。また、彼らの管理能力はすばらしいものがある。このように教育としての自治ははかり知れない価値を持つ貴重なものである。

規則違反の中には自動的に罰金制にしているものもある。たとえば、他人の自転車を許可なしに乗った場合、六ペンスの罰金にしている。校外で汚いことばを使った場合、（校内ではどんなことばを使ってもよい）映画館で人の迷惑になる行為をした場合、屋根に登った場合、食堂で食べ物の投げ合いをした場合、こういう規則違反には自動的に罰金が科せられる。

処罰はほとんどの場合が罰金である。つまり、小使いを渡すか、映画に行けないようになるかである。

子どもに裁判させるときに、よく聞かれる反対意見は、厳しすぎる判決になるのではないかというものであるが、実際そんなことにはならない。むしろ寛大な方である。サマーヒルにおいて今までに厳しい判決というものは一度もなかった。また、処罰は違反の程度によって左右されるのである。

たとえば、三人の女の子が他の人たちの睡眠を妨げたことがある。このときの処罰は「一週間、就寝時間を一時間早く繰り上げる」というものであった。二人の男の子が他の子どもに土くれを投げたことで訴えられた。処罰＝「ホッケー場の地面を平らにするために土運びの仕事をしなければならない」

しばしば議長は言う。「そんな訴えは問題にならない」こう言って却下されるのである。

いちど事務官がジンジャーの許可をえないで自転車に乗って、訴えられたことがある。このとき、事務官と一緒に乗った二人の職員はそれぞれ校庭を10回自転車で回るという処罰を受けた。

新しい工作室をつくっている作業員のはしごに無断で登った四人の男の子は、10分間はしごを登ったり、下ったりする処罰を受けた。

自治会がおとなの忠告を求めることはない。あ、そうそう、そんなことが一度だけあった。三人の女の子が台所の食物庫を襲った。そのときの処罰は小使いの没収だった。ところが同じ日の夜、また同じことをしてかした。自治会は、こんどは映画鑑賞禁止にした。しかし、またまた台所を襲った。自治会は処置に困ってしまった。議長はそのとき私のところに相談に来た。私は言った。

「三人に二ペンスの褒美をやったらどうだい」

「何ですって。そんなことをしたら、みんな台所を襲って大混乱になりますよ」

「そんなことにはならないと思うよ。とにかくやってごらんよ」

議長は三人に二ペンスづつやった。二人は受けとることを拒否した。そして三人はもう台所の襲撃はやめるとみんなの前で誓った。そして約束を守った。

——ほんの二カ月間だけではあったが。

自治会ではきざな態度はめったにみられない。そういう態度を見せればみんなから嫌がられる。十一歳になる、自己顕示欲の強い男の子が自治会で立ち上がり、明らかに本題とは関係のないことを長々と話してみんなの注目を浴びようとした。本人は注目を浴びたつもりでいるのだが、みんなからやじがとんで、沈黙した。子どもは誠実さに欠ける態度に対しては敏感に反応するものである。

サマーヒルでは自治がうまくいっていることがおわかりいただけたと思う。事実、自治のない学校は進歩的な学校とはいえない。妥協的な学校といえるだろう。生徒に学校生活を定める自由が与えられていない限り、自由のある学校とはいえない。つまり、権力者がいる限り、本当の自由は存在しないのである。厳しい権力者よりも寛大な権力者の方がたちが悪い。ガッツのある子どもは厳しい権力者に対しては反抗して、抗議をするが、寛大な権力者は子どもを骨抜きにして惑わす法を心得ているからである。

校内における自治は、静かな生活の良さを心得ていて、いたずら坊頭の乱棒や無関心と立ち向かう年長者が数人いる方がうまくいく。これらの年長者はしばしば議長に選ばれるが、彼らこそ真に自治を求め、これを信じているのである。一方、十二歳までの子どもは自分たちだけでは自治がうまくいかない場合が多い。それはまだ社会性ができていないからだ。しかし、サマーヒルでは七歳の子どもでも自治会に欠席することはめったにない。

ある年の春、不運なことが続いた。それは社会意識のある上級生たちが、大学入試合格後、卒業していった後のことだった。校内には上級生はほとんどいなかった。大多数の生徒はいたずら盛りの時期であった。口先では社会性をのぞかせるが、まだ社会を動かすだけの年齢には達していない。規則を自分たちで作るがすぐに忘れて違反してしまう。校内にいる上級生は、偶然にも個人主義的傾向の強い生徒ばかり残っていたため、下級生のいたずらなどに関心を示さなかった。それで、教師が先頭に立って校則違反に対して攻撃を加えたのである。私も自治会で、上級生の、反社会的とは言えないが、非社会的行動に対して反省を促した。下級生の反社会的行動に対して無関心を装うのは止めよう

と諫めた次第である。

幼い子どもは自治にはほとんど無関心であるといつてよい。子どもたちだけにしておくで本当に自分たちだけで共同体が作れるものかと不安になることがある。子どもの価値観はおとなとは違ふし、その作法も違ふのである。

子どもを黙らせ、行儀よくさせるには厳しいしつけがいちばん容易な手段である。だれでも恐い上等兵にはなれるのである。

しかし、静かな生活を保護する理想的な方法が他にあるかといえば私の答は「わからない」としか言ひようがない。サマーヒルの試行錯誤によつてもおとなの静かな生活は得られなかつた。しかし、子どもの方は騒々しすぎる生活にはならなかつたはずである。おそらく最後の決め手は幸福かどうかということになるだろう。この基準でいけばサマーヒルは自治の中ですばらしい妥協を見出したといえよう。

あぶない武器などの使用を禁じているが、これも一つの妥協である。空気銃も禁じている。校内で空気銃を扱いたい少数の生徒は校則が嫌いである。しかし規則を破るようなことはしない。子どもは自分たちが少数派だと認識するとあまり反抗しないものである。

サマーヒルで解決困難なことが一つある。それは「個人対社会」の問題といえるものだ。いわゆる番長に率いられたグループが、他の生徒にいやがらせをしたり、水ををかけたり、就寝時間を破つたりして他人に迷惑をかけるとき教師も生徒も困りはてるものである。番長のジーンが自治会で非難を浴びた。自由をはきちがえているとして非難ごうごうであつた。これを見て、心理学者の訪問客が言つた。

「こういうやり方は間違っているわ。あの子の顔をごらんさない。不幸が宿つてるじゃないの。彼女は今まで人から愛されたことがないのよ。だからこんなふうになんでよつてたかつて攻撃すれば、今まで以上に愛から遠ざかつていくわ。彼女に必要なのは非難ではなく愛なのよ。」

私はこう答えた。

「私たちは愛を持って彼女を更正させようと努めてきました。何週間も彼女

の反社会性を許してきました。しかし彼女はわれわれの愛と寛容を受け入れてくれません。彼女はみんなをバカ者扱いにして、どんなことをしても簡単にだませるんだと思っているのです。個人のために社会全体を犠牲にすることはできません。」

私にはこの解決方法がわからない。わかることはジーンが十五歳になれば番長を卒業して社会性を持った女の子になるだろうということだ。私は多数の意見をだいにしたい。子どもが嫌われ、非難されたままで何年も放っておくわけにはいかない。自治会の非難に関して言えば、一人の問題生徒のために他の多くの生徒を犠牲にするわけにはいかない。

かつてサマーヒルに来る前に悲惨な生活を送ってきた六歳の子が入学した。彼は弱い者いじめをする子で、憎悪に満ちた、破壊的な子であった。四歳児の子どもたちは彼にいじめられ、いつも泣かされていた。こういうときには自治会は何か手を打たなくてはならない。そのとき、当然弱い者いじめの方に厳しい判決がでる。この子の両親の教育の過ちを、家庭で愛にはぐくまれた子どもたちに尻拭いさせてはならない。

ときどき私はこの子に停学を命じなければならないことがあった。彼のために学校が地獄と化し、みんなが困るからである。私はこんなことをしなければならなかったことを残念に思っている。敗北感を感じる。しかし、私には他に方法がなかった。

私の長年の経験の中で、生徒の自治に対する私の見方が変わってきたらどうか。答えはノーである。私には自治のない学校など考えられない。みんなも自治を歓迎している。これは訪問客に対しても誇を持って見せたい。しかし、訪問客の前で自治会をやるのも欠点がないわけではない。ある自治会で十四歳の子が私の耳もとでささやいた。

「ねえ先生、アンネナプキンを便器につめていたずらした女の子たちのことを議題にあげようかと思ったんだけど、こんなに参観者がいる中ではねえ」

「参観者なんかどうでもいいことだよ。思ってたとおりに議題にあげなさい」

彼女はそのとおりにした。

実用的な公民道徳の教育的価値はどんなに強調してもしすぎることはない。サマーヒルの生徒は自治権を獲得するために死をも辞さないことであろう。私の見たところ、週に一度の自治会は一週間分の勉強よりも価値があると思う。これは人前で自己表現をするすばらしい舞台である。たいていの子どもは恥かしがらずに立派な自己表現ができる。読み書きができない子どもが分別のあるスピーチをすることもしばしばであった。

サマーヒルの民主主義にかわる方法を私は知らない。これは政治上の民主主義よりも優れているかもしれない。なぜなら子どもの方がお互いに対して慈悲深いものであり、特定の利害がないからである。また、より純粋な民主主義だといえる。なぜなら、規則が公開の場で作られるため、選出された代表が手におえなくなるという問題はなくなるからである。

結局、自由の子どもが獲得するものは広い視野であり、それがまた自治を重要なものとするのである。自治会で作られる規則は外観にとらわれず、本質にせまるものである。校外の行動に関する規則は外部の不自由な文明社会に対する妥協としてつくったものである。「しゃばでは」——外部の世界では——些細なことで大騒ぎをして貴重なエネルギーを浪費している。あたかも、おしゃれな服を着たり、「畜生」ということば使うことが人生の一大事件であるかのように。サマーヒルでは、人生に何の役にも立たないような外見上の些細なことには捉われない。そうすることによってこそ、未来を見すえた社会性が生まれるのである。“spade”（すき）のことを“damn shovel”と言うと、汚ないことばだと言って眉をひそめられるのであるが、どんな土工にきいても“spade”は本当に“damn shovel”だと認めているではないか。